

気象報道の現場から*

岩谷 忠幸**

1. はじめに

1994年に気象予報士が誕生して以来、その数は4000人近くに上り、多くの気象予報士がテレビやラジオで活躍している。気象業界からだけでなく、アナウンサーやスチュワーデスなど様々な業界からの転身組が見られ、バラエティーに富んだ気象キャスターが登場した。

気象予報士制度が施行されると同時に、私は幸運にもテレビの世界に入った。気象予報士という新資格に対する話題性もあり、各放送局は施行日(1995年5月18日)に気象予報士の資格を有したキャスターを必要とした。しかし、第1回試験の合格者が500人と比較的少なかった為、当時民放テレビ局向けに天気解説原稿を提供していた私にも出演依頼が無い込み、オーディションなしで出演が決まった。希望者が殺到する今では考えられない選出であり驚きであった。

これまで8年間、民放テレビで気象キャスターとして気象報道の現場に携わってきた。天気予報番組はエンターテイメント的な一面を持つ一方、台風や大雪時には報道番組の中でも特に重要な情報となる。私はこれまで台風や大雪の情報以外に、水害や火山噴火などの災害現場に派遣され取材してきた。また、自然科学の企画番組を担当することで様々な分野の研究者を取材してきた。本稿ではこうした経験を踏まえ、気象報道における気象キャスターの現状や今後の役割について報告する。

2. 気象キャスターの現状

2.1 気象予報士キャスター

気象キャスターは気象予報士とは限らない。独自の

局地予報を公表するには資格が必要だが、解説するだけであれば資格は必要としないからである。気象予報士の資格を持った気象キャスター(以下では、気象予報士キャスターと呼ぶことにする)の他、アナウンサーやタレントが気象番組を担当している。アナウンサーは話し手のプロで大変聞き易く、タレントは容姿や話術などで個性を生かした魅力がある。一方、気象予報士キャスターは気象の豊富な知識を基に、特に災害時における臨機応変な対応を期待されている。

2.2 気象キャスターは時間との戦い

気象庁から発表される天気予報は5時と11時と17時の1日3回。この時間帯はニュースの直前である。予報の発表と放送開始までの時間が短いということは、気象キャスターは時間との戦いを強いられる。私の場合、気象庁の発表から50分後の17時50分頃には、出演しなければならない。スタジオに入る時間を考えると40分程の時間しかない。事前に気象情報の支援資料(気象庁から配信)に目を通し、ポイントは何か、話題を何にするかなど事前に考え、必要なデータの作成や映像のコメント等を考えておく。事前に大筋の予報の傾向をつかんだうえ、17時予報が入ったところで最終的な原稿作成を行っている。夏の夕立ちや台風接近の時などは情報が目まぐるしく変わり、時間ぎりぎりの判断となる。

放送準備は分単位の行動、さらに放送本番になると秒単位での行動となる。放送の始まりと終わりは時間が決まっており、放送は時間通りに終わらなければならない。コメントが長ければ言葉が途中で切れてCMに入ってしまうし、短ければ沈黙の時間が出来てしまう。わずかに3秒間余っただけでも時間の長さを痛感する。心の中では「3秒よ、早く過ぎ去れ!」と思いながら、長い3秒を待つこととなる。

さて、天気予報の番組で一善苦勞するのが話題探し

* From the spot of a weather report.

** Tadayuki IWAYA, フジテレビ気象キャスター
iwaya@h5.dion.ne.jp

© 2002 日本気象学会

である。通常、天気予報番組の時間枠は決まっているので、晴天が続いた時は気象解説のコメントが少なくなる一方、相対的に話題の比重が増えることになる。例えば、「アイスクリームやビールが売れる温度」「日焼け止め対策」など。内容に責任を持てるよう、この一言のためにデータ解析や取材などで多くの準備時間を要する。天気予報はたかが数分されど数分なのである。

2.3 モバイル気象予報士

モバイル機器の進歩はすさまじい。私は全国各地の野外で天気予報を放送することが多いが、以前は苦勞が多かった。人里はなれた場所での中継となれば、気象情報を入手するために、車で一番近い民家にお邪魔し、FAX 機器を借りたものであった。

しかし、最近は携帯電話や PHS が全国に普及し、衛星電話も小型化した。現在はパソコンで気象データや FAX を受け、中継現場では携帯電話のメールにより情報を入手している。富士山山頂や沖縄の船上などからも放送している。携帯電話とノートパソコンを持てば、ほとんどの場所から天気予報が伝えられる時代になったと言える。今後は野外で放送する気象キャスターが益々増えるであろう。

2.4 プームが去った？ 独自の局地予報

気象予報士の登場で目玉となったのが「局地予報」ではないだろうか。市区町村単位の局地的なポイントについて独自に天気予報が出来るというものである。気象予報士誕生当初は、多くの気象予報士キャスターが独自の局地予報を行った。1時間ごとに天気や気温をグラフにしたものが登場した。私も「リクエスト天気」というコーナーを作り、視聴者からの葉書を紹介しながらリクエストに答える局地天気予報を独自に行った。プロ野球の球場で雨が降りそうな時など、多くの人々が感心を寄せる場所での局地予報には関心が高かった。しかし、リクエストに答える局地予報は長くは続かなかった。リクエストした人にとっては必要な情報であっても、多くの視聴者を満足させる情報になるとは限らないからである。

画面のスペースや時間の制約から気象庁の予報と独自予報との差がほとんどなく、テレビやラジオでは次第に独自の局地予報が姿を消し、気象庁の予報が主流となってしまった。解説には違いはあるが、天気予報のマークの表示を変える番組は少なく、気象予報士本来の資格が活かされなくなった様に感じる。

3. 難解な気象用語

視聴者の方々から一番多く質問されるのが「降水確率」である。科学的には的確な情報だと思うが、正確に理解されているとは言い難い。

「降水確率が何%で傘を持つか?」というアンケートを100名に行ったことがある。50%で傘を持つ人が過半数を占めて最多であった。回答は20%から70%までばらつきがあった。女性が低い確率、男性が高い確率という傾向であった。

降水確率の意味を聞くと、降水確率が高いのは大雨などと、雨の強さや範囲、持続時間に関係していると思っている人が意外に多かった。それぞれの体験上の印象なのであろう。

そのためか、「降水確率が20%なのに激しい雨が降った」などとお叱りを頂くことがある。「降水確率はあくまで確率で、雨量や地域に関係ない」と答えるのだが、なかなか理解してもらえない。

そもそも温帯低気圧による地雨と、夏の夕立のような対流性の雨では、確率と現象に大きな違いがある。地雨は広い範囲で雨の降ることが多く、対象地域全体としての降水確率は高い値で表現される。一方、夏の夕立のような対流性の雨は局地的な雨であり、対象地域全体としての降水確率は低い値で表現される傾向がある。激しい雨になる夏の夕立であるが、対象地域全体で50%以上の確率で予想されることは少ない。

季節で特徴が違うため、降水確率の数値だけで判断が難しく、気象予報士が判断を求められる。雨が降るのか、降らないのかと。結局、客観的な降水確率を主観的に放送せざるを得ないことが多い。

4. 気象キャスターは理科の先生?

天気予報は防災情報であるが、平穏時には多くの視聴者に見てもらうため(視聴率を上げるため)エンターテインメント性が重視される。そのため、コンピューターグラフィックスを駆使したものや、気象キャスターが野外で伝えるものなど様々なスタイルがある。気象学という難しさをなくし、楽しさの中に「なるほど」と思わせるポイントを作るのが気象キャスターである。インターネットが普及し、欲しいときに気象情報を見ることができるようになり、また気象情報そのものにもあまり差が見られない現状では、特にエンターテインメントに重点が置かれる。

その1つの可能性として「理科の先生」的な役割があるのではないかと考えている。私が担当している企

画番組が参考になるかもしれない。天気予報とは別枠で、気象や環境問題、動植物、先端技術、伝統文化などの企画番組を放送している。富士山山頂や流水接岸の知床、桜並木など気象に関係する話題のほか、沖縄のサンゴ礁や宇宙ステーション「ミール」、ブナ林の効果など自然科学全般のテーマを取り上げてきた。ニュースの中では科学の分野を取り上げることが少ないので、放送されて人々の目に留まることには価値がある。もちろん、気象キャスターは研究の専門家ではないが、自然科学の一分野である気象を解説するため、視聴者にとって身近な科学者に映るようだ。やわらかく言えば理科の先生的な役割ができるのだと思う。理科離れが叫ばれている中、天気情報の伝達だけでなく、エンターテインメントを通じて、科学の啓蒙や知識の普及に役立っていると自負している。

さらに今後は地球温暖化や環境問題等について、重要な役割を果たすことが出来ると考えられる。

5. 災害における気象情報

5.1 災害現場を見て

私は何度か災害現場へ行った。有珠山噴火や玄倉川事故の現場へも派遣された。有珠山では噴火中に現場に向かい、報道陣など関係者だけが入ることが出来る場所で取材を行った。安全が確保されているとはいえ、幾度かの小さな噴火を目の当たりにし、死の恐怖を感じた瞬間でもあった。

一方、玄倉川ではまだ犠牲者が行方不明である状況の中で生中継をすることとなった。熱帯低気圧（当時は弱い熱帯低気圧と呼んだ）が接近したため、大雨が降り短い時間に川が増水し、河原でキャンプをしていた家族が流された事故であった。熱帯低気圧は弱くても接近すれば大雨を降らせることは我々にとって当然のことであったが、天気予報で危険性が十分に伝わっていなかったのではないかと悔やまれ、改めて天気予報の責任の重大さを痛感した。この事故をきっかけに気象庁では一般に誤解を招く「弱い熱帯低気圧」という表現をやめて、「熱帯低気圧」という呼び方に変わった。

5.2 台風の現場から

台風接近で高波中継の生放送をするため、千葉県館山市へ向かった。その場所で意外な光景を目にした。海水浴場がオープンしていたのである。「注意」を意味する黄色い旗が出ていたが、主催者はセーフダイバーによる波や潮流などの実地調査により、「注意が必要だ

が遊泳は出来る」と判断していた。周辺では海水浴場では「遊泳可能（緑の旗）」の区域もあった。

「海水浴を控えるように」という行動を制限するコメントだと、営業妨害になりかねないと感じた。しかし一方で、商業主義は安全対策がないがしろにされる場合もある。

災害を未然に防ぐという観点から、注意報や警報は的確な情報であると思うが、国民の危険度に対する認識が低下していないだろうか。注意報、警報は対象地域が広く、安全を重んじるため、空振りのな情報になってしまうことがある。そのため、頻繁に発表される注意報や警報に国民が耳慣れてしまい、危機感が欠如しているように思う。あまのじゃくにならぬよう、注意報や警報がより細かく、精度の高い情報になることを期待したい。

6. 気象報道の課題

6.1 問われる気象予報士キャスターの質

はじめに述べたように、気象予報士は4000人近くに上りその経歴も様々である。刺激を与えよい効果をもたらしたのは事実である。しかし、最近懸念されることがある。予報現場の経験がほとんど無い気象予報士キャスターが多く登場し、ペーパー気象予報士キャスター乱立の時代を迎えている。気象情報は防災情報に直結し、国民の命や財産を守る重要な役目を担っている。災害時に対応が出来なければ、気象予報士キャスターの意味が無いのである。資格を取得しているだけで重宝がられた時代も終焉を迎え、今後はその質が厳しく問われてくるであろう。早い時期に気象予報士制度を見直し、気象予報士キャスターの技能評価やスキルアップのための制度が必要になるであろう。

6.2 研究者との連携

天気で挨拶が始まる程、日本人と天気は馴染み深い関係である。気象キャスターは防災上の観点からみても、その発言は国民に与える影響は大きく、また気象や環境の研究の発信源にもなりうる。地球温暖化防止などを訴えるには、最も適したメッセンジャーではないだろうか。

しかし、一方で気象予報士は新しい資格制度で、全体的に質の向上が必要とされる。そこで、日本気象学会や気象庁には気象予報士キャスター育成の環境作りを是非お願いしたい。連携が機能すれば、的確で信頼のある情報をスピーディに発信していく事が可能になるであろう。